

英語現在完了形について

On the English Present Perfect

山本幸一

Koichi Yamamoto

1. はじめに

昨今の英語教育においては、例えば、高等学校の科目名から「読む」、「書く」が消えているように、「聞く・話す」の「コミュニケーション」が重視され、学習の基本である「読む・書く」が軽視されている。このことは英語学習にとって大きな損失であると考え。当然ながら、英語圏に生まれ育てば、膨大な時間、英語に接して、話し言葉から始め、母語として英語を習得できるが、日本で学ぶ場合は、そのような環境にはないため、少ない学習時間を効率的に使う必要があるからである。「加速装置」として、文法解説による理解に基づき、文字媒体である「読む・書く」を通した、言語への「意識化」を重視した学習が重要である。この点は、ネット情報やeメールで、rapid reading, rapid writing という文字情報の高速処理が要求される時代であれば、なおさら該当することである。また、岡田（2004）の次の指摘にも表われている。「英語をコミュニケーションの道具として習得することだけを目的にすると、英語の形と意味の対応を的確にとらえたり、言葉としての英語のおもしろさを味わったり、英語の背後に見え隠れしているものの味方や考え方に対する関心はややもすると薄れてしまいます」。

他方で、当然ながら、知識の二重構造という問題も避けては通れない。文法

知識を「宣言的知識」ではなく、「手続き的知識」とすること、つまり、学習して活用を待つだけの「知識」に終わらせず、「技能」として活用できる文法知識にまで高めるには、多量に読む・聞く・書く・話すという言語活動を豊富に行い、文法知識を「自動化」する必要がある。また、言語は音的に構成されているので、音声訓練が不可欠で、文字と音を連動させる必要がある。英語学習は「意識化 (consciousness raising)」と「自動化 (automatization)」、つまり、一方で「学習」(learning) (母語を通じた理解と思考を通して、学習を効率的に進める)、他方で「獲得」(acquisition = to let English grow) (外国語に多く触れ、英語を育てる側面。特に音声活動をすること。)の複線で進められるべきである。本稿は、この「意識化」という観点から、学生に如何に「現在完了形」を指導したらよいか、を念頭に置いて授業を行いながら考えたことをまとめたものである。

2. 現在完了形についての学生の理解

学生の現在完了形の理解についてはどうであろうか。筆者が担当しているライティングの授業では、エッセイを課題として課しているが、次のような現在完了形に関わる間違いが学生の一部に見られた。

- (1) Last year I have come back to my hometown.
- (2) My grandmother has gone 7 years ago.
- (3) I have been there only once when I was in a kindergarten.
- (4) I have ever been to a concert.
- (5) Recently more and more nature is decreasing.

(1) - (3) は現在完了形と過去時を示す副詞との共起の問題、(4) は副詞 ever の使い方、(5) は recently の使われる時制、相の問題、これらは、高校までに学習した現在完了形の理解が不十分な学生のいることを示している。

森 (2003) は、大学生に数コマの絵を見せ、話を英語で作成させたり、英

文の物語を読んで意見や感想を書かせたところ、現在完了形で表すべきところを過去時制で表現している例が多く見つかったとして、次の例を挙げている。日本語、英語ともに学生が作成したものであるということである。

- (6) キャットマンは「ベルを手に入れた」と言った。

Catman said "I recovered a bell".

- (7) 私はブラッドの映画をあまり見ていない。

I did not watch Brad's movies very much.

- (8) 私も金のベルはずっと前からほしかったんだ。

I wanted a gold bell long time.

森は、日本語に「～た」がある時は、英語で過去時制で考える傾向にあるとし、現在完了と過去を区別して使うために、ある事態が生起し、それが現在とつながりをもっているかどうかを意識して、時制と相を捉えさせることの大切さを述べている。その通りであるが、次のような米国における状況を考えると、学生のこのような間違いも無理からぬこととも思える。宮川・本吉(1995)は、David Crystal (Rediscover Grammar) から次を引用している。In American English, there is a tendency to use the past tense instead of the present perfective.

3. 「～た」・「～している」と「現在完了形」・「現在進行形」

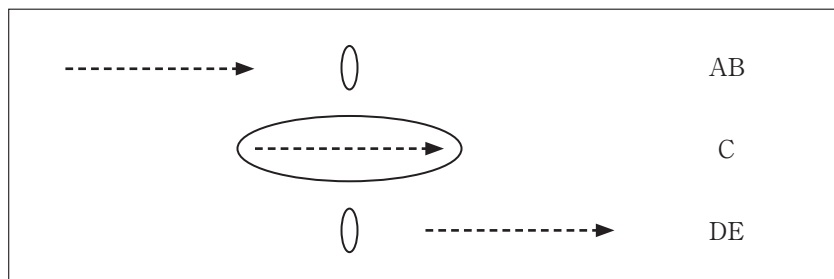
それでは、どのように現在とのつながりを意識させたらよいだろうか。第1に、日本語で「～た」がある時、完了であれば、「～してしまった」、経験は「～したことがある」、継続は「ずっと～している」と、定型の日本語表現が当てはまるかを確認させ、当てはまる場合は現在完了形を使わせることである。第2に、「～ている」という表現に注意をさせることである。継続はもちろん、完了、経験も「～ている」で表現される場合があり、また、「～ている」は英語の現在進行形とも対応するので複雑であり、この周辺事情の区別

を注意させる必要がある。現在進行形は「事態の生起中」を示し、現在完了形は、「事態の生起の後の状態」を示し、この両方を「～ている」では示すことができる。他方、現在進行形は「生起の前の状態」を示すことができるが、日本語の「～ている」では表現できない。この場合は、「～しかけている」という日本語に対応することになる。これらの点は学生が間違え易いポイントである。学生には、以下の説明と表を作成して理解を深めさせることにしている。

日本語の「～している」と、英語の進行形、完了形について

バスが止まりかけている	The bus <u>is stopping</u> .	A
彼は明日アメリカへ発つ予定だ	He <u>is leaving</u> for America tomorrow.	B
バスが走っている	The bus <u>is running</u> .	C
バスは止まっている	The bus is parked (<u>has stopped</u>).	D
学校は丘の上に建っている	Our school stands on that hill.	E

上の例文に対して、次のような概念図が対応している。次図において、楕円は「できごと」、破線は「状態・動作の継続」を指す。



日本語の「～している」は、CDE を表し、英語の進行形は、ABC を表し、英語の完了形は D を表している。

4. 完了形の用法

完了形の、完了・結果、経験、継続の3用法については、学校文法でよく知られている。完了・結果、経験（以降、「存在完了」と呼ぶことにする）では動作・状態が「完結」するが、継続（以降、「継続完了」と呼ぶことにする）は動作・状態が「持続」するため、従来用法は、「存在完了」と「継続完了」の異質な用法に2分されることになる。浅川・鎌田（1986）が述べているように、「現在完了形の意味と言われて来た「継続」「完了・結果」「経験」という意味は、現在完了形の用法の違いから生ずるものではなく、むしろ動詞（句）の特性の違いや文脈によって与えられるものであるといえよう。」そうであれば、「存在完了」と「継続完了」の2つに共通する特徴を考え、完了形としての統一性と、2つの用法の異質性を明確な形で示すことが望まれる。

5. アクティブ・ゾーン／プロフィールの不一致

現在完了形の議論を進める前に、Langacker（1995）で述べられているアクティブ・ゾーン／プロフィールの不一致（以降、「AZ-PFの不一致」と呼ぶ）について見てみよう。

「PF」とは、言語使用者が特に注目する際立ちの大きい部分であり、言語表現が直接指し示す部分である。

「AZ」とは、言語表現に表されている「関係（relation）」に直接関わる部分である。「AZ-PFの不一致」を、(9) (10) の具体例で見てみよう。

(9) David blinked.

(10) She heard the piano.

(11) David's eyelids blinked.

(12) She heard the sound of the piano. (Langacker (1990))

(9) (10) において主語の“David”、目的語の“piano”が指し示している対

象、つまり、PF は、それぞれ、人間の “David”、楽器の “piano” である。しかし、これらは、“blinked”、“heard” と直接関わる対象ではない。人間の “David” 全体がまばたくわけでもなく、楽器の “piano” が聞く対象であるわけでもない。関係と直接関わる部分である AZ は、“David”、“piano” にそれぞれ関連した “eyelids”、“sound” である。このように (9) (10) においては、「AZ-PF の不一致」が生起している。対して (11) (12) は、この AZ を言語で表現した文である。Langacker は、「AZ-PF の不一致」が存在するのは、言語表現にとって自然なことであり、むしろ、(11) (12) のように、AZ-PF が一致することの方が稀であるとしている。(9) (10) の「意味の2層構造」は次のようにまとめることができる。

表面の意味：	言語表現の伝達内容は、観察対象である「デイビッド／ピアノ」についての叙述（状態）である。
背後の意味：	述語「まばたきをする／聞く」が直接関係するのは、対象の「部分」としての「まぶた／音」である。

6. 現在完了形の分析

have の意味変化、文法化を通して、完了形の3用法の共通特徴を探ることにしよう。

6-1 have の比喩的意味変化

have の比喩的な意味変化について見てみよう。瀬戸（2007）の have の項目には、have の比喩的な意味変化について、次の趣旨の記述がある。「物を手に保持している」が中心義で原初的な形態である。そこから、「自分の物として所有している」に展開し、「家族、友人、属性、知識、感情、義務などの物に見立てられるあらゆるものを所有している」という意義に広がる。更には、「これから行う予定を所有している」や、「ある状態を所有している」へと展開する。そして、完了形では「完了した行為をその状態で持続させる」とい

う「状態の持続」という比喩的意義として捉えられるとしている。具体的な例文としては次のようなものが挙げられている。[]内は筆者である。

- (13) He has a rifle in his left hand. [手に保持している]
 (14) He has a gun inside the sweatshirt. [身体に所持している]
 (15) My brother has a wife and two little children. [家族を所有]
 (16) The child has dark hair and blue eyes. [属性を所有]
 (17) The president had a good idea of what was coming. [知識を所有]
 (18) Well, I have something to tell you. [義務を所有]
 (19) Right now I have my hands full. [状態を所有]
 (20) They have just finished a report for the Norwegian government.
 [状態の持続]

(13) – (20)の展開を眺めると、haveの文法化への軌跡が分かる。「物理的な対象を所持している」から「所有している」。そして更に、「非物理的な対象を所有している」から「状態を持続している」に変化をしている。

6-2 haveの文法化

完了形は歴史的には、「所有の意味を表す動詞 haveの構文」から発展してきたと言われている。現代英語においては、この構文を起源として、一方では「使役構文」が発達し、他方では「完了形」が発達したと言われている。

- (21) have + NP + pp
 → have + NP + pp (I had my hair cut.) 使役構文
 → have + pp + NP (I have eaten lunch.) 完了形

完了形に発達する過程での haveの意味変化について見てみよう。原初的な構文 [have + NP + pp] において、所有する対象は NP である。

(22) He has the work finished. (仕事を終えた状態で所有している)

この構文の、ppの「結果状態」に意味の重点が移ると、時間的経過の意味が表面化し、「所有」から「持続」の意味に変化する。

(23) He has the work finished.

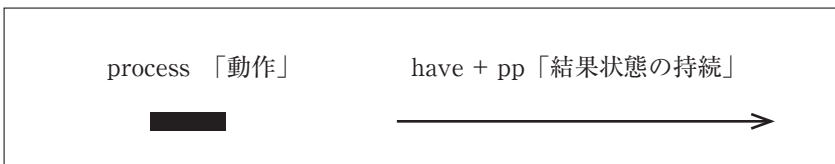
(仕事について終えた状態を持続させている)

haveの意味が「所有する」から、時間経過の入った「持続させる」意味に変化するのと共に、haveとの結びつきが強くなったppが目的語位置に移る。

(24) He has finished the work.

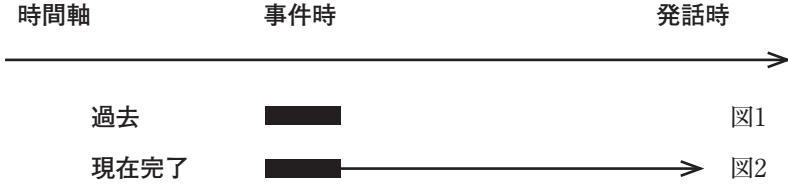
(仕事が終わった結果状態を持続させている)

haveの意味が希薄化し、動作が前景化するにつれ、プロセスの表す「事件時」の「動作」と、have + ppの表す「事件時～発話時」の「結果状態の持続」との意味の複合体が形成される。この構造について、動作を黒い太線、have + ppを矢印で、以下のように図示することにする。



6-3 現在完了形の共通特徴

完了形の共通特徴を、過去時制の図1と対比して、次の図2のように示すことにする。左の黒い太線が過去の「できごと」で、右の矢印ができごとの「結果状態の持続」である。太線はプロファイルされていることを示している。



(25) I have already read the book.

(26) I have read the book before.

(25) (26)のように、動詞が perfective として用いられる場合は、図3に示したように、この「状態の持続」の部分には動作の結果の持続として、プロファイルされないままである。



(25) (26) のような「完了」、「経験」の用法の場合は、事件時から状態持続の終点時までの時間の範囲に位置づけられるのは、動作の「結果状態」である。図3に示したように、事件時の動作は太線で示されており、プロファイルが置かれているが、「状態の持続」が太線で示されていないのは、プロファイルが置かれていないことを示している。ここでは、5節で見た Langacker (1995) で述べられている「AZ-PF の不一致」が働いていると考えられる。表現の意味、つまり PF は、事件時における動作でありながら、“have” と関わる AZ は、動作の「結果状態の持続」である、というのが本稿の主張である。尚、「完了」や「経験」の解釈の違いは、動詞の特徴、副詞、文脈によって決まるが、「完了」は外的状況を表し、「経験」は心的状況を表す、と言うことができる。

6-4 現在完了形の共通特徴と AZ-PF の一致・不一致

(25) (26) に対して、動詞が imperfective として用いられる (27) では、

「結果状態の持続」の部分は「動作や状態の持続」としてプロファイルされる。

(27) I have lived in Japan for years.

従って、「存在完了」を示す図3に対して、「継続完了」は図4のように示すことができる。「状態の持続」の部分は、AZ-PF が一致している。

図3では「状態の持続」の部分は、プロファイルされないままであったが、図4ではプロファイルされるため太線で示される。「存在完了」と「継続完了」とは、メトニミー的多義で結びついた構文である。



図4

(28) I've not read the book yet.

(29) I've never read a novel.

また、(28) (29) のような「完了」、「経験」の否定文では、「非完了（経験）状態」の「継続」の意味となり、肯定文と違い、AZ-PF が一致して「継続」用法と同じ構造となると説明できる。(31) も図4で示される。

(30) He has sung in the choir.

(31) He has sung in the choir ever since he was a high school student.

(30) では、「経験」の意味であるが、(31) では、1回のできごとではなく、できごとが習慣化して繰り返されるという捉え方がされている。個々のできごとより上位の階層における「習慣という状態の継続」として把握されている。

7. 時を表す副詞との共起

時を表す副詞との共起については、従来の考えでは、現在完了形が表す事態が、発話時とのつながりをもつ不特定の過去時に発生したものであるとされ、発話時から切り離された特定 (definite) の過去時を表す副詞では、事件時が独立してしまうため共起しない。他方、不特定 (indefinite) の過去時を表す副詞であれば、発話時の時制に依存して解釈されるため共起可能である、というものである。しかし、現在完了を発話時の時制、つまり現在時制に基盤を置く考えには疑問である。なぜなら、そうであれば、(32) の非文が説明できないからである。

(32) *These days I have been to New York.

本稿では、時を表す副詞との共起ができない点について、特定の時や期間は、bounded (期間が明確に限定されている) であり、「点的把握」と捉えられ、完了形の表す事件時と発話時をつなぐ「線的把握」とに不整合を生じるからであると主張する。対して、不特定の時や期間は、unbounded (期間が明確に限定されていない) であり、「点的把握」ではなく「線的把握」と捉えられ、事件時と発話時をつなぐ「線的把握」と整合することになり共起が可能である、と主張する。具体例で確認してみよう。(33)のように、特定の過去時を示す副詞とは共起できない。

(33) *When has the Civil War broken out? *It has broken out in 1861.

しかし、(34) の in the past のような不特定の過去時を表す副詞の場合共起できるのは、unbounded であり、「線的把握」と捉えられ、不整合が生じないからである。

(34) The relation between the two countries will be friendly as it always

has been in the past.

(江川 (1991))

(35) は「副詞の表す時間内（この場合では、「午前中」）のできごとであれば許容される」ということで、よく取り上げられる例である。「事件時から発話時まで」が副詞の表す時間に包摂されるため、不整合は生じない。

(35) My mother has called me this morning. She told me to come back home.

完了形は発話時を示す副詞の一部との共起も可能である。

(36) At present I have finished the first two chapters of the book.

(Declerck (1991))

「線の把握」との不整合が生じないのは、「状態持続の終点時」として捉えられるためであると考えられる。対して、right now, these days 等は、bounded であり、「状態持続の終点時」として捉えられないため、共起できない。

以上の分析を基に、完了形と整合性のある副詞をまとめると、次の3つの場合が考えられる。

- ・ unbounded な広がりをもつ場合
- ・ 「状態の持続」の起点、終点を表す場合
- ・ 「状態の持続」の期間を包摂する、あるいは、同期間の場合

8. おわりに

英語と日本語は言語的距離 (linguistic distance) の開きが大きく、対極的な言語である。その違いは、文法と音声の2面において見られる。明示的に文法や発音の違いを理解させ、その上で、訓練を通して自動化する必要がある。

英語運用能力に向けた実践的訓練が一層重視される中においても、文法指導の重要性が低下するわけではない。むしろ、明快な説明を通した「効率的学習」が必要である。説明が概略過ぎて学習者が文法規則を一般化できることに役立たなくてもいけないし、逆に説明が詳細過ぎても英語嫌いを作ることになってしまう。学習者の学力状態に合わせて調節し、段階的に精緻な説明にして行くことが重要である。本稿では、現在完了形の3用法における共通特徴を提案し、「存在完了」と「継続完了」を、AZ PFの discrepancyの有無を通して、メトニミー的多義として結びついた構文として捉えた。また、過去時の副詞との共起の可否については、「線の把握」と「点的把握」との不整合からの説明をした。生じた事態の結果状態が発話時まで持続しているかどうかを意識して相を捉えさせ、また、過去時を表す副詞句との共起の可否の理解を通じて、学生に過去と区別して現在完了形を正しく使用させたい。

参考文献

- 浅川照夫・鎌田精三郎 (1986) 『助動詞』英文法選書第4巻. 大修館書店. / 安藤貞雄 (1996) 『英語学の視点』開拓社. / 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』金子書房. / 岡田伸夫 (2004) 『英語教育と英文法の接点』美誠社. / 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』開拓社. / 久野暉・高見健一 (2013) 『謎解きの英文法 時の表現』くろしお出版. / 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』小学館. / 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社. / 樋口万里子 (2007) 「英語の現在完了形の時制の意味機能」『日本認知言語学会論文集』7. 457-467. / 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』開拓社. / 三原建一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原建一『ヴォイスとアスペクト』研究社. / 宮川幸久・本吉侃 (1995) 『高校英語 Q&A 実用指導辞典』教育出版. / 森暢子 (2003) 「過去と現在完了の理解—日本語との比較による学習の検討—」『中部地区英語教育学会紀要32』/ Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha. (安井稔 (訳) (1994) 『現代英文法総覧』開拓社.) / Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter. / Langacker, R. W. (1995) "Raising and Transparency." *Language* 71: 1-62. / Leech, G.N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman. / Ota, A. (1963) *Tense and aspect of present-day American English*. Kenkyusha. / Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY, Cornell University Press.